

快護通信

A good care makes a good smile. A good smile induces happiness.



～ 福祉用具のプロに聞きました ～

矢崎化工(株)様による「たちあっぷ・ひざたちC(回転式)」を使ったトランスファー研修会

介護現場の現状

突然ですが皆さん、介護士が離職する理由の7位が腰痛である(参照:厚生労働省第4回社会保障審議会福祉部会福祉人材確保専門委員会(2015)「介護人材の確保について」)ということをご存知ですか?

そして、そんな現状にもかかわらず、その対策として福祉用具や介護ロボットを導入するなどの対策をとっている全国の施設の割合は、わずか3割程度にすぎないという調査結果もあります。

導入がなされない主な理由としては、

- ・値段が高い
- ・置き場所がない
- ・かづくで介助した方が早い

等が挙げられるそうです。ちなみに現場の求める福祉用具の条件は、操作が簡単でいろいろな人に使えて、介護負担や介護にかかる時間を大幅に削減できるもの、ということです。

「たちあっぷ ひざたちC(回転式)」

今回ご紹介させていただく矢崎化工株式会社の「たちあっぷ ひざたちC(回転式)」(写真①)は、そんな介護現場の望みをかなえてくれる優れたものです。

先日我々光洋-デイサービスケアコンシェルジュは矢崎化工株式会社の福島様、中谷様より、「たちあっぷ ひざたちC(回転式)」を使用したトランスファーの研修会を受講しました。

「たちあっぷ ひざたちC(回転式)」は立ち上がりの困難な方に便利な膝折れ防止クッションのついた回転テーブルで、抱え上げ介助が必要なく安全にベッドや車椅子からの移乗が出来るユニークな福祉用具です(写真②)。

まずは座学にて、移乗・腰痛予防・求められる福祉用具の条件についてご講義頂きました。

説明によると、腰痛予防の対策として挙げられるのは、①介助姿勢の改善…前かがみや腰をひねるような姿勢を取らないこと。

②十分な介助(作業)スペースの確保…狭い場所で介助を行うと無理な姿勢を強いられがちになるため、レイアウトの変更なども必要です。

③福祉用具の導入と活用…③に関しては、施設長や管理者の理解と協力がとても重要です。

そして実践研修。まずは中谷様によるデモンストレーションです。ほとんど自力で立ち上がることのできない利用者を想定してデモを行って頂きましたが、回転テーブルに上半身を乗せて、足をしっかり足台に置いてもらい、腰辺りに軽く手を添えて、くるっとテーブル回すだけの操作でいとも簡単に車椅子に移乗することが出来ました。カモ全く必要がないほどスムーズで簡単です(写真③)。ポイントは膝折れ防止のクッションで、このクッションがあることにより立位が不安定な方でも安全に移乗できます。

次に私たちも練習をしてみました(写真④)。最初は少し戸惑いながらぎこちなく行っていましたが、3～4回練習すると軽々と移乗できるようになりました。回転テーブルも回しすぎてしまうことがないよう90°ごとの固定位置で自動的にロックし、土台もしっかりしているのでテーブルごと倒れてしまう心配もなく、かなり大柄な方の移乗の際も無駄な力が要りません。

別添のスライディングボードを併用して滑らすようにするとより簡単です。滑り台を滑るように自然に体が車椅子へと誘導され、何とも気持ちがいい!!全く力を入れずこんなに簡単に移乗介助を行うことが出来れば、介護現場はどれほど楽になるだろう!と心から実感できた研修でした。

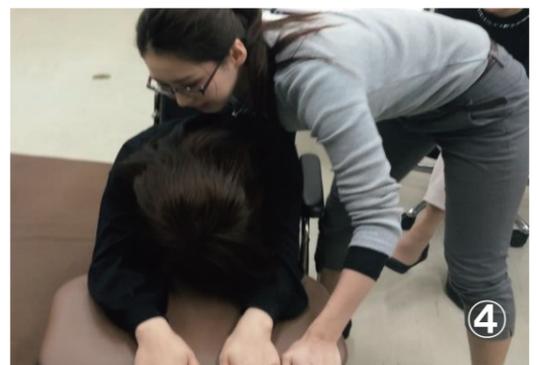
矢崎化工株式会社では施設・病院様向けセミナーを実施なさっています。楽しくて身になるセミナーです!ご興味のある方はぜひ下記までお問い合わせを!

★★矢崎化工 株式会社★★

本社福祉介護機器部

TEL:054-281-8867 FAX:054-284-0863

<http://www.kaigo-web.info/>



この春読みたい1冊

誰も知らないうちに隠している本当の自分に気付かされる1冊



「春にして君を離れ」
アガサ・クリステイ著
ハヤカワ文庫

アガサ・クリステイといえば、言わずと知れたミステリー小説の女王。「オリエント急行殺人事件」や「そして誰もいなくなった」など、数々の名作を生み出しています。

そんなアガサ・クリステイの作品の中で唯一といえる、殺人事件の起こらない小説、「春にして君を離れ」をご紹介します。

主人公ジエーンは、弁護士と成人した3人の子供に囲まれ何となく自由なく過ごす40代の主婦。完璧な母親・完璧な妻であり続けることが生きがいの彼女の作り上げた家庭は、完璧な家庭であるはずでした。

ある日ジエーンは、末娘のお見舞いのため一人でバクダッドまで出かけます。帰り道、列車の不具合で砂漠の真ん中の鉄道宿泊所で何日か足止めを食ってしまったジエーンは、一人で自分の人生や家族のことを思い返していきます。

今まで自分が夫にしてきたことは本当に夫のためだったのだろうか。子供たちに良かれと思って与えてきたものは、選んできたものは、本当に子供たちのためになっていったのだろうか…。もしかして、家族のためと思ってやって来たことは、家族を苦しめているだけだった…?

すると彼女の脳裏に女学生だった頃の恩師であるギルビー先生の言葉がよみがえります。

「自己満足に陥らないように。」

そんなはずはない、私は間違っていないかった、常に完璧だったと自問自答する彼女ですが、忘れていた様々な過去の出来事を思い出すとともに、やがて自分が知らぬ間に気付かぬふりをしてきた本当の自分に気付かされていくのです。

こうして悩みの果てに家族のもとに帰り着いたジエーンが下した決断は…。

人間の本性を鋭く突いた、アガサ・クリステイの傑作です。ぜひこの春にこそ一読ください!

高齢者施設での取り組みレポート

社会福祉法人杜の里福祉会 特別養護老人ホーム成仁杜の里仙台 2011年3月11日 東日本大震災で津波が到来 津波で孤立した施設がなぜ死者を出さなかったのか

創業者の思いを込めた法人理念～すべては”願い”と”愛”から始まる～



社会福祉法人杜の里福祉会
社会福祉法人成仁会
理事長 山崎 和彦氏

<施設紹介>

入居者：長期130床、短期20床、併設ケアハウス50名

震災当時の入居者平均介護度：4.3

所在地：杜の里は仙台市若林区の三本塚（現在は荒井東）を所在地とし、仙台湾に200から300人の遺体が浮いていると報じられた荒浜地区の北西に位置していた。

施設の建物は海岸から2km弱の場所に建てられ、山崎理事長が仙台の地に「杜の里」を開設したのは1999年4月。この場所を選ぶときに、津波到来の有無を尋ねたところ、一度もないとの答えだった。同法人グループの大船渡市にある施設では毎月一度、津波を想定した避難訓練や消火訓練を欠かさなかったため、そこでの教え通り、訓練を実施して備えてきた。

*健康保険組合連合会刊行物（2012/12012/3）引用

<震災時の状況>

2011年3月11日（金）14：46 地震発生

地震規模 マグニチュード：9.0 最大震度：7.0

津波襲来中の16時過ぎの仙台の気温1.5度、地震直後から大粒の雪が桜吹雪のように降っていた。すぐに停電となり、照明、暖房、給湯設備がすべて停止する。当時、要介護「5」の入居者が50名程おり、痰の吸引が常時必要な状態の方も数名いた。地震直後から、入居者ら200名の生命を守る壮絶な闘いが全職員によって始まった。揺れが収まって間もなく「津波が来る」という情報が流れた。杜の里の入居者150名のうち、1階の49名、ケアハウス「ハートフル仙台（現在は「千年の杜仙台」へ施設名名称変更）の44名と、あわせて93名を避難させなくてはならなかった。

15：01 特養1階の入居者49名を2階へ避難完了。

15：11 ケアハウス入居者44名を特養2階へ避難完了（5名は外出中）。

15：30 高さ3メートルの第一波津波到来。

施設の1階部分が泥と海水により完全に埋め尽くされた。

施設に駐車していた自動車は、1台ずつ簡単に流され、90台が浸水した。敷地内には海岸より樹木、がれき、そして近隣の自動車も押し流されてきた。

津波は、東部道路まで達し、途中、走行中の車などをどんどん呑みこんでいった。真っ黒い塊ようになった津波は、東部道路にぶつかる、渦を巻いて戻っ

てきた。すぐに、入居者・職員の安否確認をし、全員の無事が確かめられたが、施設は孤立した。外部からの情報を得るため携帯電話を使って連絡を試みたが、ほぼ使用できない状態であった。職員の所持品である1台のラジオだけが唯一の情報源だった。

暖房器具が使えないことに加え、布団や毛布などの寝具や衣類の数に限りがあった。体をさすったりしての保温、励まし、食事の介助、排泄、痰の吸引等、自身の恐怖と不安を抱えながらも職員たちの懸命なケアは続いた。入居者の部屋割り、トイレの使用方法も全員で決めた。泥をかぶった缶詰を拾い集めると、食糧は辛うじて3日分ほどの備蓄だろうと推測された。栄養士は3日分を6日分にするつもりの量を調理して出すことにしたという。缶詰やおかゆは入居者に優先され、職員は一枚の食パンを分けて済ませた。

その後、幾度となく、余震が続いた。3月12日、自家発電機が使用できることがわかった。燃料の重油の残量から1日4時間の使用であれば、4日間維持できるという算をはじき出した。この4時間の間で、機器使用の必要な利用者への介護を集中して行うこととした。

3月14日（月）午後、東部道路から施設までの通行が復旧する。その直後より自衛隊から大量の食糧と寝具が確保される。

3月15日（火）動力ポンプの借用が可能となり、地下タンクより重油のくみ上げに成功。自家発電の利用、これまで通り1日4時間となる。

3月16日（水）水道局に、給水車の出動を依頼。

3月17日（木）浄化槽のくみ取り実施。仮設トイレを設置。

3月18日（金）灯油と石油ストーブがそろい、各ユニットに暖房が通る。

3月19日（土）被災した公用車と職員自用車の移動が開始。仙台市と東北電力の全面的な支援で電気が復旧する。

<現在の施設の環境>

2011年の東日本大震災の際には、大津波による壊滅的な被害を被りながらも150名あまりの命を一人も欠かさず守りぬいた。2015年に新築移転し、震災体験が活かされた建築設計（強靱・耐震）はもとより、1か月の発電能力をもつ7階屋上に設置された発電機、防水扉付冷蔵食糧貯蔵庫（1か月分の食糧を貯蔵）や暖房機器などが備えられた。

また、震災体験から入居者の生活空間は2階以上に設け、2階は事務所、1階は地域交流を主としたイベント広場として活用している。



写真

- ①：震災で倒壊した施設内部
- ②：震災直後の施設周辺
- ③：津波到来後の状況
- ④：現在の杜の里施設外観

山崎理事長の話 ～基本理念の実践（浸透）と加わったもう一つの理念～

寒さが相当厳しかったので職員が毛布がわりに抱きしめてマッサージをし、温めて助けたのです。普段通りの介護しかしなかったら、低体温症になり、たくさんの方が亡くなっていたはず。個人の暮らしをその人らしく守っていく、という私たちの理念に基づく実践が、非常時にあってもなされていることに感激しました。私が考えていた以上に職員が育っていた。指示を待たないと動けないような職員は一人もいませんでした。

法人の基本理念は、

- 1 広く愛すること。
- 1 礼をもって者に仕えること。
- 1 広く万人のために活動すること。
- 1 健康を大切にすること。
- 1 生涯学ぶこと。



すべては“願い”と“愛”から始まる
(法人ロゴ)

ここまでが、開設当時から毎朝唱和されてきた基本理念だったのですが、大震災のあと、気づかぬうちに法人の基本理念が一つ増えていたのです。それが、「すべての人を救うこと。」いつの間にこれが入ったんだ？と聞いたけど皆笑っているだけ…。気づかぬうちに法人の理念が一つ増えていました。その通りだから文句は言いませんでしたが。

<震災当時の所在地>

